



根石大輔 Daisuke Neishi
中国新聞社呉支社 記者
(2008年3月 法学部卒業)

友達を大切に、若さと情熱を持ち続けたい。

—この仕事を選んだきっかけは？

小さいころから、本や新聞など字を読むのは好きでしたが、大学時代は、テニスサークルで、アクティブに活動していました。机に座って事務仕事をするよりは、外に出ている人々と話ができる、営業関係の仕事を目指していました。中国新聞社の採用試験を受けるきっかけとなったのは、大学4年の時に参加した、同社の学内セミナーでした。いろいろな場所でいろいろな人に出会い、話を聞いてきて、記事を書くという新聞記者の仕事が、自分の性に合うのではないかと思い、この職業を目指すことに決めました。ずっと呉に住んでいて、広島が大好きなのも理由の一つですね。

—新聞記者という仕事のやりがいとは？

新聞記者になる前は、大事件や大事故を取材することがこの仕事の醍醐味だと思っていました。だけど最近では、目立たない事柄を取材して、それを世の中に発信することで、社会の反応を得ることに醍醐味を感じるようになってきました。「これはいけんのんじゃないか!」という正義感を記事に表現できたとき、そして自分が書いた記事に対して感謝されたときも、この仕事にやりがいを感じます。

—仕事で、大切にしていることは？

仕事に限らず、何ごとにおいても楽しむ、楽しいと思込むことです。勉強でもスポーツの練習でも、どうせやらなければいけないことなら楽しみながらやりたいです。ましてや、他人に伝える記者という仕事では、自分が楽しいと思って取材して書いた



記事でないとなんと読者が読んで楽しいわけがないですからね。

また、取材を通して聞いたこと、見たことの中には、本当はニュースになるけど、自分自身がそれに気付いていないため、記事にならないものたくさんあると思います。何がニュースになるのかをもっと見極められる判断力が欲しいですね。そのためには、文章力や取材力などのスキルを身に付けることはもちろんですが、今以上に、もっと視野を広げることが大事だと思います。



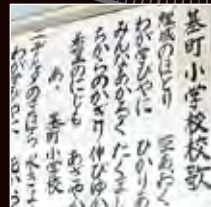
あと10年ぐらいたてば、いろんな意味で若さを失っているかもしれません。それでも情熱は失わずに、新鮮な気持ちでがんばり続けていきたいですね。これからさまざまな所で経験を積み重ねながら、自分の適性を伸ばしていきたいと思っています。

—広大生へのメッセージ!

学生のときは、本当に楽しかったです。今でも、1カ月でもいいから、学生時代に戻りたいと思いますね。大学時代には、まとまった時間を使って、旅行に行きなさいという人が多くいます。だけど僕は、友達同士で、喫茶店でダラダラと何時間もおしゃべりできるのも、学生時代だけだと思います。旅行は、社会人になってもできるでしょう。ある意味無駄で、ぜいたくな時間の使い方ができるのは、学生時代だけです。ぜひ、大学生のうちに、友達と思い出をたくさんつくってほしいですね。

社会の第1線で活躍している先輩たちの職場を訪ねて、突撃インタビュー。
仕事のことから学生時代に身につけておくべきことはまた「インターンシップ」はたまた「インターンシップ」
私たち学生の素朴な疑問・質問にお答えいただきました。

羅針盤 compass OBG&OG 紹介



—先生の仕事内容は？

子どもへの授業が中心ですが、意外と大変なのが「校務」です。校務というのは学校全体の仕事のことで、私は生活部で児童会などを担当しています。私自身、教員になって9年目で、自分の学級のことより、この校務の仕事の方が多いです。本心では、授業の準備にもっと時間を使いたいんですけどね。準備に力を入れた授業はこちらも本気だし、児童の反応もすごく良いですから。



仕事は、何より体力勝負です。少々熱が出てても学校に行きますし、運動会の練習も体を使います。一番大変なのは、保護者の方への対応です。皆さん自分の子どもについて、真剣に話をするので、精神的にきつときもありません。でもそれをきっかけに仲良くなることもあるので、これも縁だと思いますよ。

—岡上先生は、どんな先生ですか？

子どもたちからは、怖い先生だと思われるでしょうね。怒るときは、すごく厳しいと思いますよ。でもそれは、本気で子どもと向き合いたいからです。中途半端に怒っても、子どもは見破りますから。自分や友だちのことを大切にできなかったり、チャレンジせずにすぐあきらめたりした時に怒ります。

壁にぶつかると、落ち込むこともありますよ。でも日々、子どもの笑顔や周りの先生方の助けから、パワーをもらっています。仕事においては、妥協せず突っ走るタイプかもしれません。ポジティブに考えることを意識しています!



岡上美紀 Miki Okaue
広島市立基町小学校 教員
(2002年3月 教育学部卒業)

私の突っ走るパワーの源は、趣味の海外旅行です。先日の休暇は、トルコに行ってきました。

—教育者としてのやりがいとは？

子どもの成長する姿を見られることです。先日、私が教員2年目に担任をした子どもが、7年ぶりに会いに来てくれました。有名高校に入学したという報告をしてくれたんですが、当時とだいぶ印象が違ってびっくりしました。どちらかというと内気だった子が、はきはきとしゃべっていて。何年か時がたって子どもたちの成長を見るとき、この仕事の良さを実感しますね。

教育者を目指したきっかけは、私が小学3年生のときの担任の先生です。すごく怖かったんですが、素晴らしい女性の先生で、私の目標だったんです。教員試験に合格して、私が教員という立場になり、10年ぶりに再会したときは感動しましたね。あこがれのひと、同じ場所に立っているという思いが込み上げてきました。



—広大生へメッセージを

学校に限らず、とにかく現場は厳しいです! 仕事は、人と人の勝負ですから、大切なのは、その人との縁を大事にできるかどうかだと思います。私は、今でも大学時代に会った友人との縁は、とても大切だと思っています。そして学生の皆さんには、これから出会う人との縁も大切にほしいですね。学生時代に、友人や先輩、後輩を大切に、そのためのコミュニケーション能力を培ってください。

教育は、人と人の勝負。

取材を終えて



取材をし、記事を書くというお仕事をされている根石さんから、私たち学生スタッフは、記者という仕事の面白さや、記者としての心構えをたくさん教えていただきました。また、根石さんが話された「大学時代の過ごし方」のアドバイスは、とても新鮮に感じました。私も、大学でできた友達を大切に、本当の意味で有意義な時間の使い方ができたらいいなと思います。

取材・記事/教育学部1年 野元 祥太郎



スーツを着て、さあ取材だ!と意気込むも、小学校の校門をくぐって見た瞬間、懐かしさのあまり、思わず顔がほころびました。今では少し窮屈なはずの取材は、とても新鮮でした。小柄な岡上先生は、大きな6年生の男の子を「見上げてしまう」と、うれしそうに子どもたちについて話します。来年から教育系出版社に就職する私は、はつらつとした先生方とお仕事ができるのは楽しそうだなと思いました。

取材・記事/教育学部4年 林 良輔